李朝時代の絵画

朝鮮の絵画は古来中国画の影響を強く受けていますが、李朝時代になって朝鮮独自の性格と技法をもったものに発展しました。

李朝の絵画は壬辰の倭乱、丁卯・丙子の2度の胡乱という国難に見舞われ、大きな被害を受けましたが、国はその対策として図画署において絵画を奨励し、その発展に努めました。しかし、李朝時代は儒教の思想に基づいて画業を賤業とみなし、画員は十九品中の最低の位階で冷遇されました。このことも李朝絵画の発達を遅らせた一つの原因と考えられます。彼等は宮中や高官の庇護を受けて、専ら宴楽儀式図、国王や功臣などの肖像画、あるいは宮中や高官が使用する屏風画などの制作に従事しましたので、技術的には優れていても、一般的に形式的な作品が多く、雅味豊かな独自の絵画を生みだすことはできませんでした。

李上佐筆 雪山騎驢図

咸悌健筆 竹図

李朝500年の絵画は北画系、南画系の作品を中心にして、画員の手で特異な発達を示した精細で写実的な肖像画、屏風などに描かれた工芸的な絵画と、多岐にわたっていますが、全体を通じて朝鮮民族特有の温和な気質が、簡潔でおだやかな作風のうちに見出されます。

李朝絵画の神髄は18世紀初頭に盛行した文人画に見出されます。李朝時代は科挙によって官僚を登用しましたので、絵画は詩、書と共に士人の余技として尊ばれました。豊かな教養に恵まれた政治家・学者、詩人達はその余技として多くの優れた文人画を生みだしました。画題は中国、日本のそれとほとんど同じで、山水、花卉翎毛、魚介、人物、神仙など広範囲に及んでいますが、士大夫達は虚心高節を象徴する竹をはじめ、梅、菊、蘭の四君子を好んで描きました。李霆の墨竹、魚夢竜の墨梅、李昱応の墨蘭は特に有名です。朝鮮独自の画題としては葡萄、鵲、朝鮮雉子、赤雁、黄鳥、虎などがあります。また、鄭敾は山水画に長じ、日本の画人が好んで富士を描いたように金剛山図の名作を遺しています。ほかに、安堅、李上佐、沈師正、李寅文などは宋元画様式の厳しい山水画で有名ですし、花卉翎毛画では李厳と朝鮮閨秀画家の第一人者である申夫人がよく知られています。葡萄の黄執中、蝶の南啓宇、鷲鷹の張承業、神仙、人物、風俗画などを得意とした金命国、金弘道、市井村落の風俗画に新しい境地を開いた申潤福なども優れた画人です。

南啓宇筆 花鳥猫図

金命国筆 寿老図

季刊 美のたより No.23
昭和48年3月1日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.